

=== T A C S 情報 第8号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和7年7月15日

農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月の平均気温は、17.7℃（対平年差+0.2℃）と平年並であった。

6月の平均気温は、23.4℃（同+2.0℃）と平年に比べかなり高かった。

7月上旬の平均気温は、28.1℃（同+3.9℃）と平年に比べかなり高かった。

(2) 降水量

5月の降水量は、122.0mm（対平年比99%）と平年並であった。

6月の降水量は、129.0mm（同75%）と平年並であった。

7月上旬の降水量は、15.5mm（同17%）と平年に比べかなり少なかった。

(3) 全天日射量

5月の平均全天日射量は、18.4MJ/m²/日（対平年比100%）と平年並であった。

6月の平均全天日射量は、18.2MJ/m²/日（同105%）と平年並であった。

7月上旬の平均全天日射量は、20.6MJ/m²/日（同133%）と平年に比べかなり多かった。

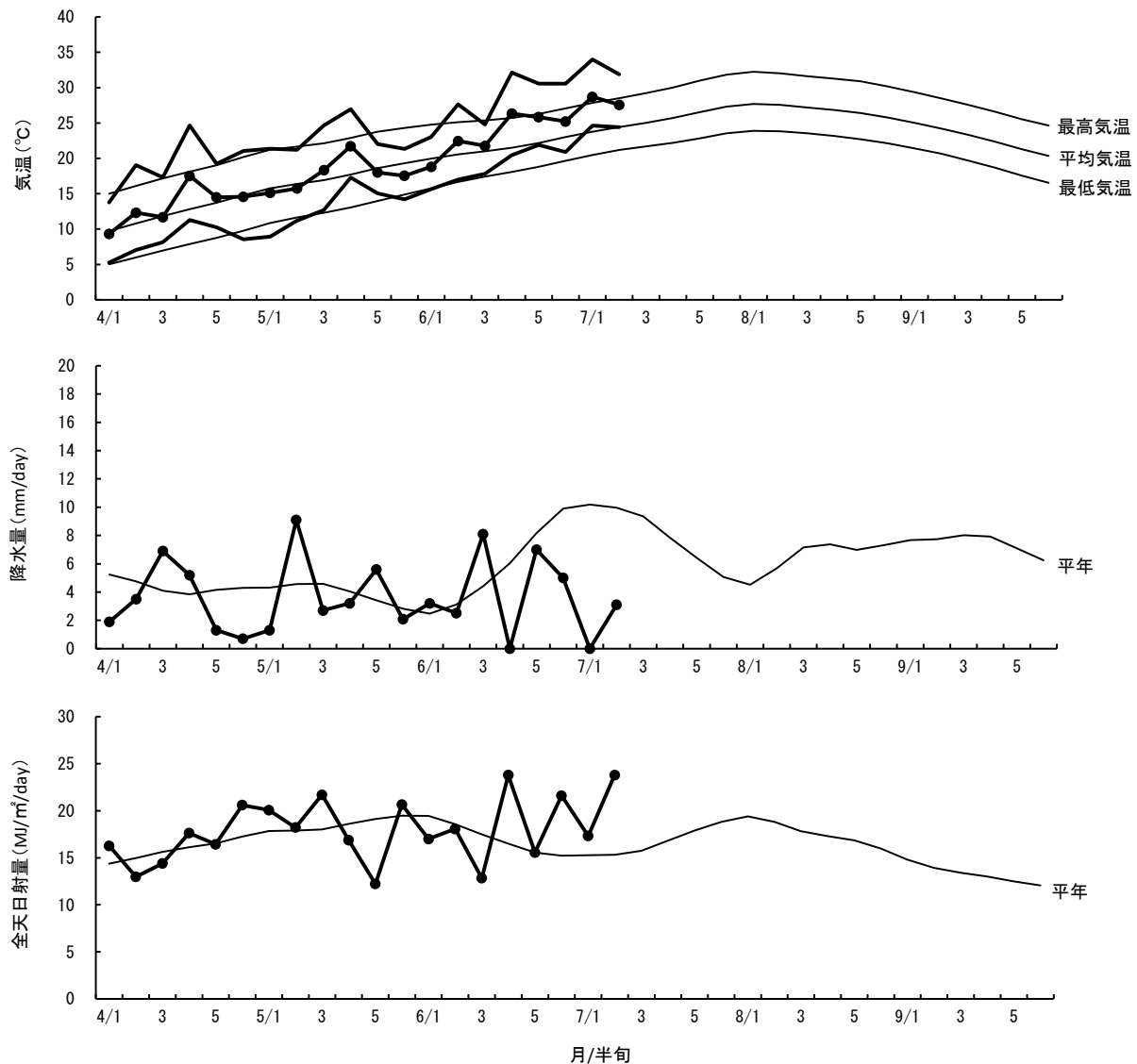


図1 令和7年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育状況（生育観測ほデータ）

（１）コシヒカリ

平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色（SPAD）はかなり淡く、葉齢は0.3葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色（SPAD）はかなり淡くなっている。

幼穂形成期は、平年に比べ2日早い7月9日となった。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年に比べ2日早い7月30日頃と見込まれる。

表1 「コシヒカリ」の生育状況（7月15日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD		
R7	5月13日	81.6	22.0	473	13.0	4.0	30.4	7月9日	(7月30日)
R6	5月14日	80.4	22.0	468	13.0	4.0	32.6	7月10日	7月31日
平年	5月14日	78.6	22.3	485	12.7	4.0	33.6	7月11日	8月1日
前年比・差	-1	101	100	101	0.0	0.0	-2.2	-1	(-1)
平年比・差	-1	104	99	97	0.3	0.0	-3.2	-2	(-2)

注1) 平年 : H27～R6の平均

注2) 本年の出穂期は予測値

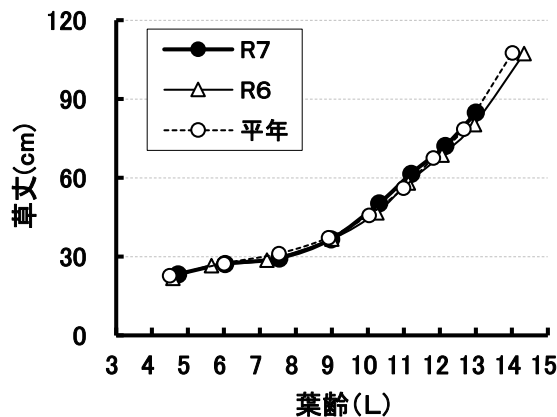


図2 草丈の推移（生観コシヒカリ）

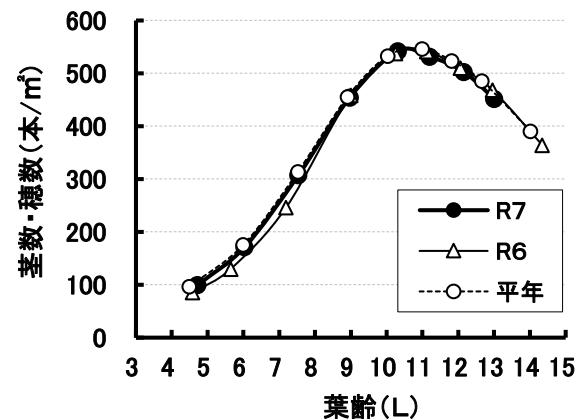


図3 茎数の推移（生観コシヒカリ）

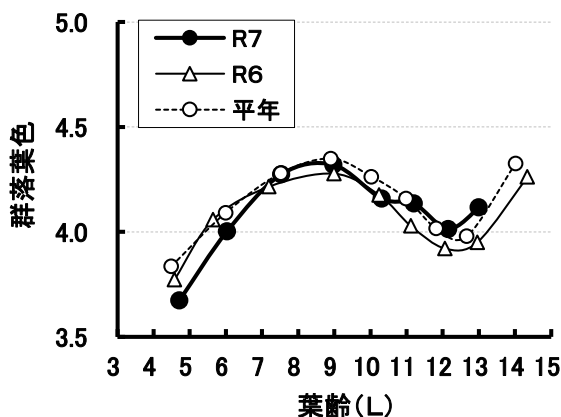


図4 葉色の推移（生観コシヒカリ）

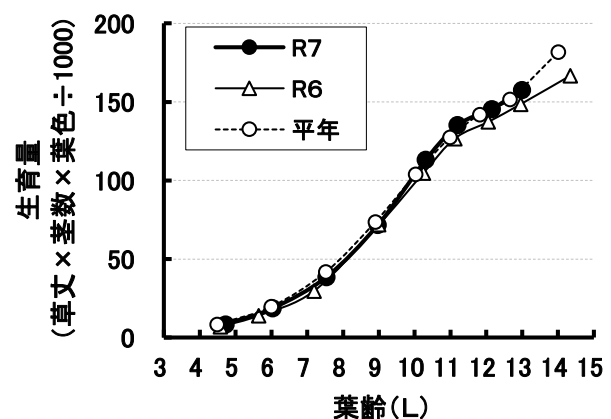


図5 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(2) てんこもり

平年に比べ、草丈、茎数、葉齢は並、葉色（SPAD）は淡くなっている。

幼穂形成期は、平年並の7月12日と見込まれる。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年並の8月3日頃と見込まれる。

表2 「てんこもり」の生育状況（7月15日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R7	5月12日	69.2	31.7	619	13.8	4.2	33.6	(7月12日)	(8月3日)
R6	5月8日	74.7	31.3	593	14.3	4.1	35.2	7月10日	8月1日
平年	5月8日	70.5	31.2	593	13.8	4.1	35.5	7月12日	8月3日
前年比・差	4	93	101	104	-0.5	0.1	-1.6	(2)	(2)
平年比・差	4	98	102	104	0.0	0.1	-1.9	(0)	(0)

注1) 平年 : H27～R6の平均

注2) 本年の幼穂形成期および出穂期は予測値

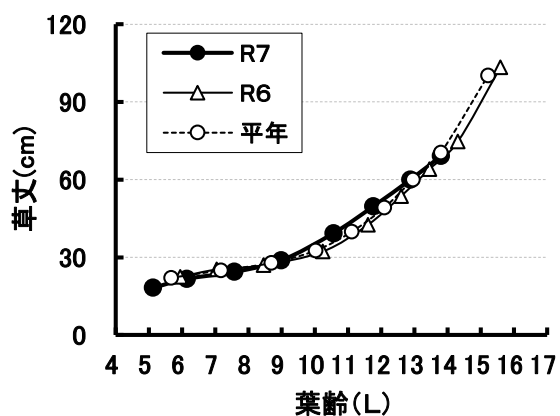


図6 草丈の推移（生観てんこもり）

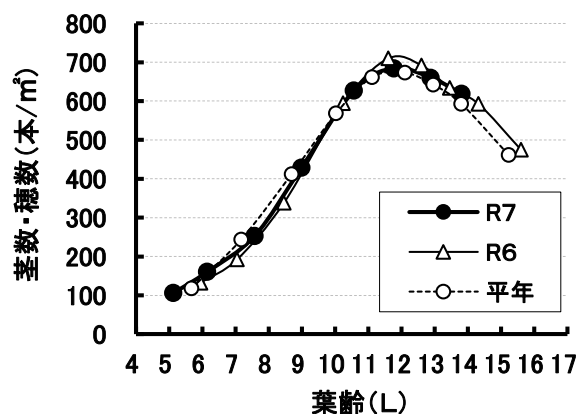


図7 茎数の推移（生観てんこもり）

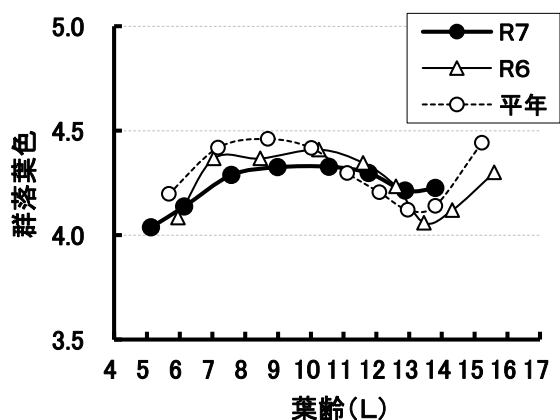


図8 葉色の推移（生観てんこもり）

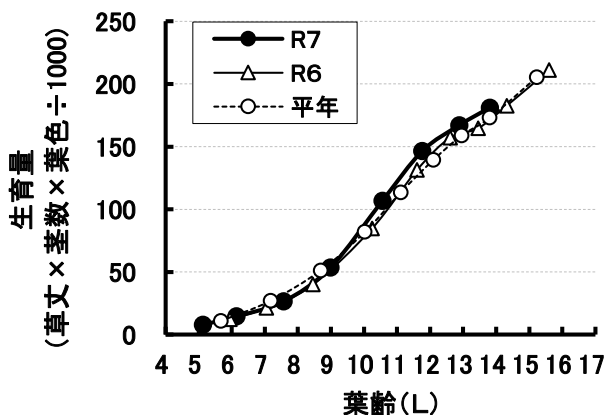


図9 生育量の推移（生観てんこもり）

3 当面の技術対策

- ・「コシヒカリ」、「てんこもり」は、葉色がかなり淡くなっていることから、稲体の活力を維持するため、以下の管理を徹底する。

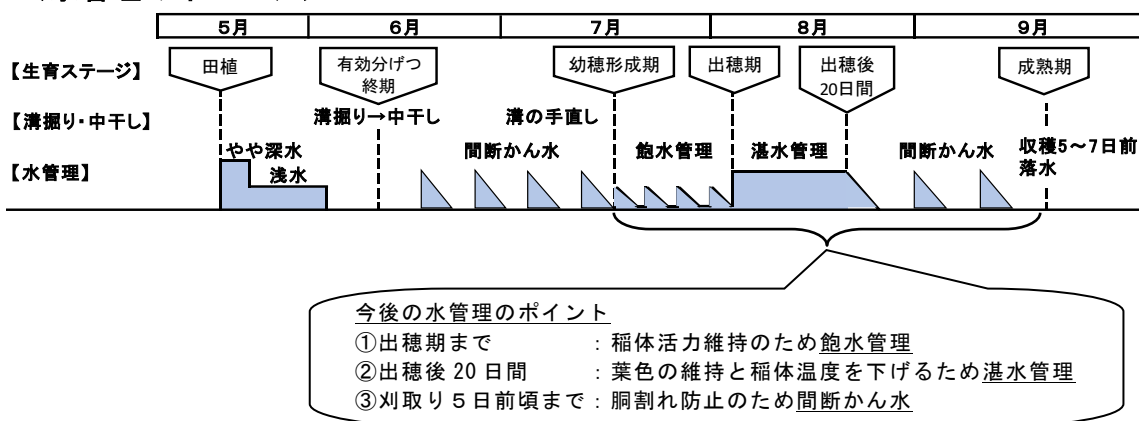
- ①出穂期までの飽水管理の徹底
- ②積極的な追加穂肥の施用
- ③出穂後 20 日間の湛水管理

- ・「てんたかく」の防除は、穂揃期（出穂後 3～5 日）と傾穂期（穂揃期防除の 7 日後）に確実に実施する。

（１）共通管理

- ・「コシヒカリ」及び「てんこもり」は葉色がかなり淡くなっていることから、出穂期までの飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を徹底する。
- ・出穂後 20 日間は湛水状態を保ち、登熟期間の稲体活力を維持する。
- ・出穂後 20 日間の湛水後、刈取り 5～7 日前までは間断かん水を行い、胴割米の発生を防止する。

＜水管理のイメージ＞



（２）「コシヒカリ」の管理

- ・現在の葉色は、令和 5 年と同程度まで淡くなっており、収量・品質の大幅な低下が懸念される。
- ・そのため、肥効調節型基肥栽培では、表 3 を目安に出穂 7 日前に必ず葉色診断を行い、葉色が薄い場合は直ちに追加穂肥を施用し、穂揃期の葉色を 4.2～4.5（砂壤土は 4.5）に確実に誘導する。
- ・また、ドローンによる追肥や流し込み追肥等の省力的な追肥方法も利用し、積極的に追加穂肥を施用する。

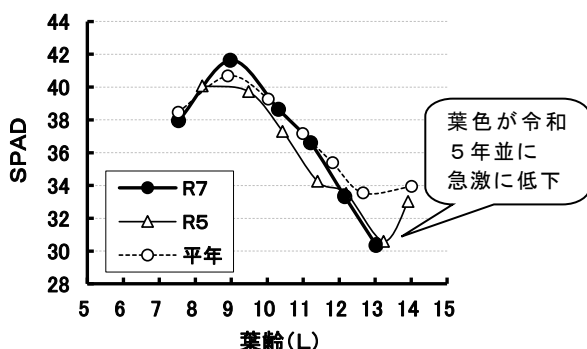


図 10 葉色の推移（生観コシヒカリ）

表 3 肥効調節型基肥栽培における追加穂肥の目安
（5 月 13 日頃移植、7 月 9 日幼穂形成期の場合）

出穂 7 日前頃の葉色診断 （7 月 23 日頃）	追加穂肥の施用 （7 月 23 日～7 月 27 日頃）
4.0 以下 (SPAD 値 32 以下)	出穂 3～7 日前に
※砂壤土は 4.2 以下 (SPAD 値 34 以下)	窒素成分で 0.7～1.0kg/10a
4.0 より濃い (SPAD 値 32 より高い)	無し
※砂壤土は 4.2 より濃い (SPAD 値 34 より高い)	

現在、県内全域で葉色が淡いため、積極的に追加穂肥を施用する

- ・分施栽培では、穂肥は幼穂形成期の生育量に応じて表4を目安に施用する。

表4 分施栽培における穂肥施用量の目安

幼穂形成期の生育量	1回目穂肥		2回目穂肥	
	時期	窒素施用量 (kg/10a)	時期	窒素施用量 (kg/10a)
適正	幼穂形成期7～9日後	1.5	1回目の7日後	1.5～2.0
やや過剰	幼穂形成期9～11日後	1.0～1.5	1回目の7日後	1.5～2.0
過剰	施用しない	0	出穂の7日前	1.5～2.0

※幼穂形成期の生育量 適正：草丈72cm、茎数470本/㎡、葉色3.8
過剰：茎数550本/㎡以上、葉色4.0以上

今後も高温が予報されているため、2回目の穂肥は窒素成分で2kg/10aを目安に施用する

(3)「てんこもり」の管理

- ・幼穂形成期頃～出穂前7日頃の葉色が淡い場合（壤土・埴壤土4.0以下、砂壤土4.2以下）は、直ちに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。

(4)「てんたかく」の管理

- ・4月30日移植の「てんたかく」の出穂期は、近年より2日早い7月13日となった。
- ・今後、平年並の気温で推移した場合、成熟期は8月17日頃と見込まれる。
- ・出穂後の高温により成熟期が2～3日程度早くなると見込まれるため、収穫・乾燥や荷受けの準備は早めに行う。

(5) 病虫害防除の徹底

①斑点米カメムシ類

7月2日カメムシ速報（第1号）発出、注意報（第2号）発令

- ・カメムシ類の増殖を抑えるため、イネ科雑草が出穂しないように畦畔・雑草地の除草対策を徹底する。やむを得ず穂が出ている雑草を刈る場合は、本田防除の直前に行う。
- ・早生品種の防除は、粉剤または液剤体系とし、穂揃期（出穂3～5日後頃）とその7日後の傾穂期の2回防除を徹底する。
- ・「コシヒカリ」及び「てんこもり」等の中晩生品種は、穂揃期の防除を徹底する。
- ・近隣に雑草地や麦あと不作付地等がある水田では、斑点米カメムシ類の発生が多くなる場合があるので防除を徹底する。
- ・斑点米カメムシ類の多発地域や、基本防除後も発生がみられる場合は、使用時期、使用回数等の農薬使用基準を遵守し、追加防除を実施する。

カメムシ防除	防除時期の目安	てんたかくなど 早生品種	コシヒカリ・富富富 晩生品種
1回目	出穂3～5日後頃 (穂揃期)	基本	基本
2回目	1回目の散布から 7日後頃(傾穂期)	基本	追加
3回目	2回目の散布から 7日後頃	追加	

図11 防除時期と防除回数の目安

例年カメムシ類の発生密度が高い地域やクモヘリカメムシ等の大型カメムシの発生が多い地域は追加防除を実施

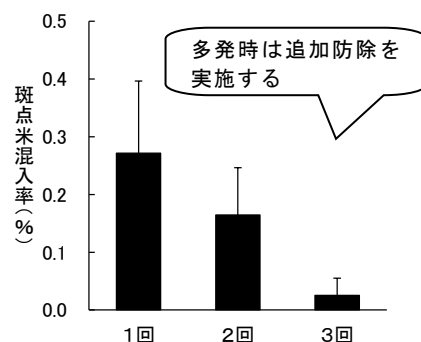


図12 斑点米カメムシ類多発年における防除回数と斑点米混入率（品種：てんたかく）
(R6登熟状況調査：畦畔沿い)

②紋枯病（紋枯病の初発確認日：本年 7 / 3、平年 6 / 26）

- ・ 本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し、適期に薬剤が株元に付着するように散布する。
- ・ 箱施薬剤と本田防除の 体系防除を行う場合は、同一系統薬剤を連用しない。

表 5 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品種	要防除水準 (発病株率)	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)
コシヒカリ・富富富	15%	出穂 10 日前頃
てんこもり	15%※	出穂 7 日前頃

※てんこもりの発病株率は追加防除の目安（暫定）

③いもち病（葉いもちの初発確認日：本年 7 / 2、平年 7 / 10）

- ・ 7 月 2 日に初発が確認されたことから、常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生を確認した場合、直ちに防除する。

BLASTAM情報（葉いもち予測システム）はこちらから
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）



④白葉枯病

- ・ 常発地等では、出穂 3 ～ 4 週間前にオリゼメート 1 キロ粒剤等を散布する。
- ・ ほ場が浸水や冠水した場合は、白葉枯病が発生しやすくなるため薬剤を散布する。

⑤稲こうじ病

- ・ 常発地や前年に発生が多かったほ場では、出穂の 10 ～ 15 日前（銅剤は出穂の 10 ～ 20 日前）に薬剤防除を行う。

⑥着色米（斑点米を除く）、ごま葉枯病

- ・ 稲体活力の低下により発生が助長されるため、適正な施肥や水管理を行う。

農薬散布に際しては、周辺住民への事前の周知と農薬の飛散防止を徹底する。

「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈、茎数は並、葉色は淡く、葉齢は0.3葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、近年に比べ、草丈、葉色は並、葉色は淡くなっている。

幼穂形成期は、近年並の7月13日と見込まれる。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は近年並の8月4日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（7月15日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R7	5月17日	70.8	23.5	512	12.5	4.1	35.1	(7月13日)	(8月4日)
R6	5月17日	71.9	25.9	567	12.6	4.2	37.9	7月13日	8月4日
近年	5月15日	69.2	24.5	529	12.2	4.2	37.3	7月13日	8月4日
前年比・差	0	99	91	90	-0.1	-0.1	-2.8	(0)	(0)
近年比・差	2	102	96	97	0.3	-0.1	-2.2	(0)	(0)

注1) R7：10ほ場平均（生育観測ほ：4ほ場、新品種実用化・ブラ削減 対照区：6ほ場）

注2) 近年値：H29～R6平均

注3) 本年の幼穂形成期及び出穂期は予測値

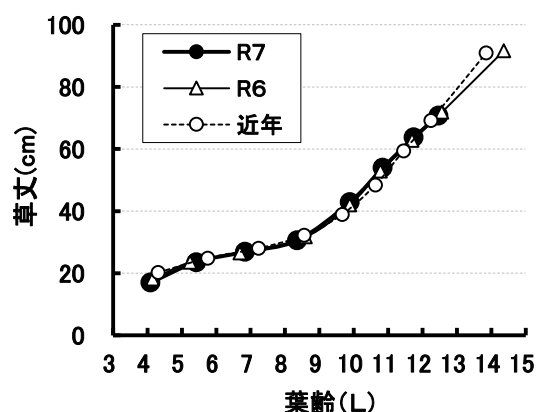


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

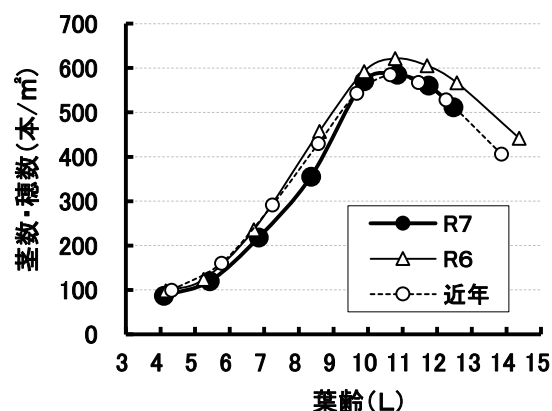


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

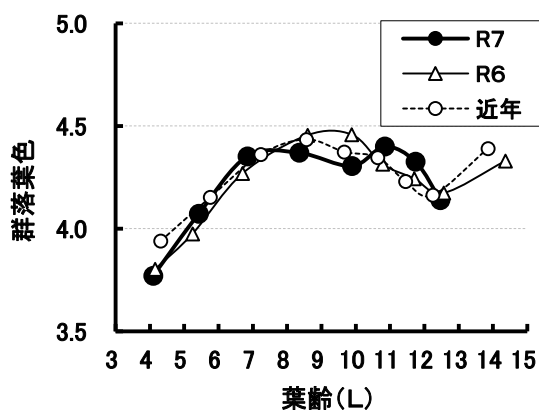


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

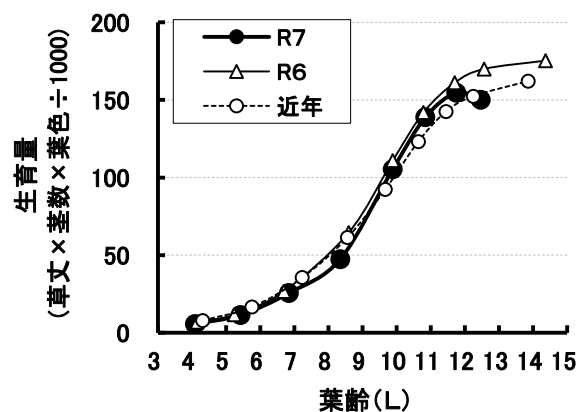


図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）

2 当面の技術対策

現在、高温で経過し、葉色が淡いことから以下の管理を行う。

- ①出穂期までの飽水管理による葉色低下の防止
- ②出穂後 20 日間の湛水管理による稲体活力維持

(1) 水管理

- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため、飽水管理を行う。ただし、葉色が濃い場合は、間断かん水を行う。
- ・ 出穂後 20 日間は湛水状態を保ち、登熟期間の稲体活力を維持する。
- ・ 出穂後 20 日間の湛水後、刈取り 5 ～ 7 日前までは間断かん水を行い、胴割米の発生を防止する。

(2) 肥培管理

- ・ 肥効調節型基肥栽培では、原則、追加穂肥は施用しない。ただし、現在葉色が急激に低下していることから、出穂 7 日前の SPAD 値が 32（群落葉色 4.2）未満と淡い場合は、出穂 3 日前までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追加穂肥を行う。
- ・ 分施栽培では、穂肥は生育量（表 2）に応じて、表 3 を目安に 1 回目を幼穂形成期の 7 日後頃、2 回目を 1 回目の 7 日後に施用する。

表 2 幼穂形成期の生育の目安

草丈 (cm)	㎡茎数 (本/㎡)	SPAD	群落葉色	生育量	
				SPAD	群落葉色
62	580	35	4.0	125	140

注) 生育量 SPAD : 草丈×茎数×SPAD÷10,000

群落葉色 : 草丈×茎数×群落葉色÷1,000

表 3 穂肥施用量の目安（分施）

幼穂形成期 の生育量	N施肥量 (kg/10a)	
	1回目	2回目
適正	0.75～1.0	1.5
過剰	0	1.5

表 4 穂揃期の生育の目安

草丈 (cm)	穂数 (本/㎡)	SPAD	群落葉色
90	400	35	4.4

出穂期までの適切な水管理と施肥により目標の葉色に誘導する

(3) 病虫害防除

- ・ 病虫害防除は「コシヒカリ」に準じて実施する。特に、「富富富」の「いもち病抵抗性」を持続させるため、穂いもち防除（穂揃期）を確実に実施する。
- ・ ただし、生育期間を通した化学合成農薬の成分使用回数が 12 以内となるように留意する。